

産褥ケア、医学美容からみる台湾女性の素肌観および化粧観

都留文科大学

山 本 芳 美

In Taiwan, as women over the age of seventy traditionally do not wear makeup, they respect the natural complexion without any cosmetics. Women who are in their late thirties or in their forties do not pay much attention to cosmetics or they even lack the confidence in making up. It may be because they have no excellent home education on makeup. Another reason may be that they lose interest in makeup because of the hot and humid climate which may damage the makeup. Consequently, they turn to emphasize skin maintenance in order to be in good complexions. For example, postpartum women may take in sufficient nutrition and have plentiful rest to maintain their physique with rosy complexions. By contrast, women below twenty are sufficiently informed with various sources of makeup information and generally tend to put on make-up with better skills.

In this article, I conclude that women over thirty-five years old believe in natural beauty without any makeup, and their attitudes towards makeup differ from those of women below twenty.

1. 緒 言

2011年に提出した研究経過報告書において、筆者は台湾の産褥ケアである「坐月子」の概略とボディケア各種を予備調査に基づいて報告した。研究2年目の本年度においては、2011年6月から2012年3月にかけて、学外研究制度を利用して約8ヵ月にわたって台湾に継続的に滞在した。これにより、 Cosmetologyに関連した多岐にわたる研究テーマを見出し、各種のインタビュー調査と文献研究に従事することができた。本年度は、台湾製おしろいの歴史、そのおしろいを使う漢民族の七夕の儀礼のほか、漢民族の人々が死者に供える紙製の化粧品についての調査をおこなった。

台湾においては、東海岸の街である台東にあるプユマ民族の南王集落に長期滞在し、プユマ民族が1940年代までおこなっていた歯を黒く染める習慣について調査した。プユマ民族においては、歯を染める際に用いた植物には2種ある。プユマの社会構造は男女ともに細かく成長段階の分かれた年齢階梯制であり、少年組に入会して3年目になった少年たちが歯を染める際には七里香（チーリーシャン 和名：沈丁花 *Daphne odora*）を用いた。10代後半の少年は、枝を火であぶり、周りにできた煤をその油分を利用して歯に吸着させる方式で黒く染めたという。女性たちが成人してから歯を染める際には、現地ではイートウンと呼ばれる腺果藤（シェンゴートウン 和名：トゲカズラ *Pisonia aculeate*）

の植物（Fig. 1）の枝を折ってそのまま歯にこすりつけ、枝からにじみ出た樹液によって染めていた^{（注1）}。母親や祖母には虫歯一本なく、黒々と染めた歯を互いに自慢しあっていた、と60代から70代以上の人々は語る。90歳の女性は、17歳の時に自分も真似してやってみたが、とても（樹液が）渋かったので一度でやめたと話していた。人々の話では、この歯を染める習慣は日本人や漢民族との接触が増えるにつれ、いつの間にかなくなってしまったという。日本のお歯黒についてよく指摘されるように、イートウンの枝を歯になすりつけることは、歯ブラシやつまようじと同様、始終歯垢を取ることで虫歯予防の意味があったと思われる。また、樹液によって染めあがった黒色の歯は当時の人々の美意識に適っていたものと考えられる。

さらに、文献研究により調べた項目には、台湾女性の美容や化粧観、服飾の変化、美容整形や医学美容の状況などが挙げられる。しかしながら、今回の研究完了報告書では前回の報告テーマと統一性を図るため、引き続き坐月子を中心に取り上げる。坐月子をめぐる身体観と、今回の現地滞在により判明した医学美容の状況からみる台湾の女性の素肌観や化粧観とは重なる面があるため、併せて報告することとした。

2. 女性たちのインタビューと文献研究より考察した素肌観と化粧観

2000年から2003年まで、筆者は台北の南港にある中央研究院民族学研究所に留学をしていた。その当時、同年代の20代後半から30代以上の女性たちは、スキンケアはするものの、いわゆるベースメイクとポイントメイクには熱心ではなかった。素顔にアイブローと口紅をほどこす程度で過ごしていた。これは、現在でも同じ世代以上に見られる傾向で、化粧する人はいるにはいるが、管見の限り、7割から8割の女性は一見目立つような化粧をしていない。



The concept of makeup and the naturalism in the postpartum service and medical cosmetology for Taiwanese women.

Yoshimi Yamamoto
Tsuru University



Fig.1 2012.2.2 台東・卑南文化公園のイトウン

一方で、当時25歳以下の女性たちは、当時、日本から直輸入されていた美容雑誌や女性誌を読んで化粧について学び、メイクアップを覚えていた。この世代の人々はすでに30代半ばに達しており、職場に向かう際などにフルメイクをおこなう人が、私見の限り、5割に達している。台北の新交通システムMRTのなかでメイクをおこなう姿を時たま見かけるのが、この世代以下の女性である (Fig. 2)。30代後半の友人の話では、1996年にMRTが開通した直後から、「電車のなかで化粧する女性が現れた」という。日本女性の「電車で化粧」が直輸入されたように見えるが、亜熱帯気候の台北では事情がことなる。車内で化粧をしていた女性に理由を聞いてみたが、冷房の効いた車内でメイクし、職場に近い駅で降りることによって化粧崩れをぎりぎりまで抑えようとする合理的な発想からの行動であった。

すでに知られているように、日本の化粧品会社の売り上げの2割はアジア市場で支えられている。化粧品の売り上げ傾向は、台湾も日本も変わらないと台湾に進出した化粧品メーカーの人々は口をそろえる^(注2)。だが、例えば、台湾ではシャンプーは売れるが、リンスやヘアトリートメント剤の売り上げは落ちる^(注3)。それは、真夏に1日に数回シャワーを浴びる生活では、シャワーを浴びるごとに髪をシャンプーで洗い、そのたびにリンスやトリートメント剤をつけるのは面倒だというのが一因である。もう一つの原



Fig. 2 2011.7.20 台北 MRT 文湖線車内で無心に化粧する女性

因は、リンスやトリートメント剤は湿度が高いために粘つく感覚になり、好まれないという事情がある。リンスやトリートメント剤が浴室にない傾向は、都市部よりも農村部に顕著である^(注4)。

仔細に見ていけば、世代によって購入する化粧品は異なる。30代後半以上の女性は、スキンケア化粧品は高額であっても購入する。しかし、ベースメイクやポイントメイク用品はアイブロウと口紅以外、興味を示さない。対して、30代前半から下の世代の女性たちは、つけまつげやマスカラなども使いこなし、日本の同世代の女性たちとほぼ変わらないメイクである。財団法人生物技術開発中心が2009年に発表したレポート『薬妝品及医学美容産品之商機』によれば、現在台湾内には18歳から44歳の女性消費者が約470万人おり、約70%の消費者がスキンケア化粧品を最も購入している。薬用化粧品は過去には35歳以上の消費者向けに販売されていたが、近年は15歳から24歳の女性が使用しはじめている。この主要な原因としては、この世代の女性たちが一世代上の女性消費者より3年から5年早く化粧をし始めるからだという。(財団法人生物技術開発中心2009:102)。なお、筆者の知り合いの複数の30代女性の声によれば、美白と保湿を重視して化粧品を購入している^(注5)。それにしても、なぜこのように世代間で化粧に対する行動が大きく異なるのかについて、30代後半以上の女性たち数名にインタビューで聞いてみた。

普段から素顔でいるHさんは、現在は民族学の研究職に就いているが、以前は助産婦の資格を持って病院で働き、20名以上の赤ん坊を取り上げた経験がある。彼女に坐月

子について聞いた話は後に譲るとして、自らの化粧について「スキンケアはするが、ファンデーションを塗ったり、ポイントメイクはどのようにしたらよいかわからない」と語った。その原因は、母親が化粧せず、家庭で特に教わってこなかったからだとして説明した。日本の40代女性は、18歳になったとき化粧品会社から案内状が来て、試供品をもらってメイクの講座を受けたり、進学先で就職のためのメイク教室があったと筆者の経験話を話したが、Hさんは化粧を教室で学んだことはないという。Hさんの話では、一般的に、台湾女性は顔色が健康的であることを重視しており、スキンケアで十分と考えている。ちなみに、Hさんによれば、スキンケア用品は1回につき3000台湾ドル程度（約1万円）購入するそうである。

化粧をどうやってすればよいか、わからないと述べた人はHさんだけでなく、40代後半のソーシャルワーカーYさんもそうであった。Yさんも簡単なスキンケアはするが、メイクはしていない。「面倒だし、特に必要を感じない」ということであった。

また、プユマ民族の70代の林清美さんも「どうしていいかわからないから、化粧はしない」と述べた。林清美さんはプユマの南王集落を拠点とする「高山舞集文化藝術服務團」という舞踊団の団長であるが、公演が多いにも関わらず、化粧はおろか口紅をすることもほとんどない。この舞踊団は10代後半から20代半ばの団員を20名ほど抱え、その半数は女性であるが、この団体で化粧を教えることもない。出番の前に訪ねてきた化粧の習慣のある女性が、若い団員や林清美さんが素顔であることを見かねて口紅をつける程度である。(Fig. 3)

30代後半以上の女性が化粧をしないことには理由があり、歴史的にみると化粧は娼妓のするものとして避けられていた。漢民族の女性たちは、後れ毛などがでないようにぴっちり油をつけて結い上げた髪に、珊瑚などがついたネットやかんざしなどでアクセントをつけた。耳に金製や翡翠製のピアスをつけ、腕にも翡翠製の腕輪などはめることが美しい姿とされていた。しかし、顔にはおしろいや口紅を通常つけなかったという。

むしろ、一般の女性にとっておしろいは、挽面（北京語の発音でワンミェン、閩南語の発音ではバンビー）、挽臉（北京語発音でワンリェン）と呼ばれる、口と手を器用に使って糸をよじらせ顔の産毛を抜く行為に用いられるものという認識であった（Fig. 4）。挽面は角質が取れて、肌がなめらかになり、顔色が明るくなる効果があるとして1カ月から2カ月ごとに行く人もいる。しかし、以前には女性が嫁入りする際に、両親が運気のよい女性に頼んで1度だけ挽面をおこなうものであって、これを「開臉」（北京語発音でカイリェン）と称した。女性は余計な産毛をとって額の輪郭をはっきりさせることで美しくなるとされ、新郎に紅



Fig. 3 2011. 7. 15 国立台湾史前文化博物館にて。民族衣装をつけた林清美さんが、口紅を親戚の女性につけてもらっている



Fig. 4 2011. 6. 30 台東の南王集落内の美容室にて、挽面施術の様子

潮した新婦の顔を見せることで魅了しようとしたと説明がある。花嫁にとっての一種の通過儀礼の意味もあったのであろう^(注6)。林清美さんも50年前の結婚時に一度だけおこなったといい、筆者が自宅に住み込むようになってから、数回一緒に行っただけである。台湾製のおしろいは、日本

の以前のおしろいのように鉛を用いるのではなく、中国大陸から輸入してきた大理石を砕いたうえで臼で引き、水と香料を加えて固形化したものである。おしろいは台湾西北部の新竹の名産品で、おしろいをつけることで顔の毛を立ちあがらせ、糸で産毛をすくいやすくした。

「レーザー照射をしたから、化粧はもうしなくていい」と言い切ったのが30代後半のカルチャーセンターで英語を教えるLさんであった。Lさんは前回の留学時からの友人で、2011年11月にインタビューした時点では、2011年4月に右ほほの1センチ大のシミをレーザー照射によって取り除いたと語った。施術中は大変痛く、その後1か月ほど痛みが残ったが、シミが消えたので満足した。その後、スキンケアはするが、ファンデーション以上の化粧をやめたという。彼女いわく、「Keeping Youngが大事であって、今以上にきれいになろうとは考えていない。私が医学美容を選んで、美容整形に行かなかったわけは、スターバックスのコーヒーか、セブンイレブンで済ますかという差だった。スターバックスが高いのは、いろいろサービスがあるし雰囲気もいいからでしょ。でも、セブンイレブンでも安くても十分においしいじゃない」ということである。

医学美容とは、おそらく2000年代半ばに出てきた診療の名称で、主に皮膚科や総合病院の一角に併設されているほか、専門診療所が「医学美容」の看板を掲げている。日本の「プチ整形」という流行語が台湾に直輸入されて「微整形」(ウェイゼンシン)を謳うところもあるが、レーザー照射や脱毛、ヒアルロン・ボトックス注射、ケミカルピーリングなど比較的軽微な施術を扱う診療所である。美容整形を扱う病院やエステなどがこれまで存在しなかったのではないが、台湾では近年、医学美容センターが大幅に数量的成長をみている。台湾大学付属、営総、萬芳、長庚などをはじめとして、公立、私立、財団法人を問わず各病院が医学美容センターを設立している。台湾微整形美塑学会の資料によれば、現在台湾で医学美容治療とサービスをおこなう診療所は4000カ所にのぼる。診療所の一か月平均の平均営業額は200万から250万台湾ドル(日本円にして約550万から680万円)で、総額にすれば医学美容の市場規模は、日本円では2630億円相当の960億台湾ドルになるという(財団法人生物技術開発中心2009:51、103-104)。日本の渋谷にあたる交通の便がよく、デパートが隣接するMRT忠孝復興駅付近には、医学美容の診療所が文字通り林立している状態である(Fig. 5、6)。診療所の急増は、台湾女性の需要の高まりとともに、2008年に中国大陸客向けに台湾内の団体観光が解放されたことがきっかけになったと考えられる。その増加には、医療ツーリズムによる観光客を期待しての先行投資という側面がある。医学美容は比較的风险が少なく、短期の滞在でも各種メニューをこなすことができるためである(注7)。



Fig. 5 2011. 6. 30 忠孝復興駅前のエステ・医学美容診療所の入ったビル



Fig. 6 2011. 8. 1 忠孝復興駅で見かけた医学美容診療所の広告

Lさんは友人たちと医学美容の診療所が発行しているチケットを共同購買し、彼女自身はレーザー照射に1枚使い、残りのチケットは別の人に転売した。それによって、1回の施術が1000台湾ドル(約3000円)程度に収まった。彼女は、スキンケア化粧品も友人と共同購買して、価格を抑えているという。2009年10月に同じくLさんにおこなったインタビューによれば、デパートがセール期に「15000台湾ドル買えば1000台湾ドル(約4万円)で2700円)の商品券を贈る」などのキャンペーンをするため、共同購入し各化粧品コーナーの景品を集めて必要な人に分けるようにしている。また、疲れた時などにエステ店の全身マッサージ(1回1500台湾ドル、約4000円)やフェイシャル(1回800台湾ドルから1000台湾ドル、約2200円から2700円)に毎月1回程度通っている。

Lさんの母親は眉を整え口紅はつけたが、それ以上の化粧はしていない。彼女によれば、台湾の女性にとって、眉を整えることは非常に重要で、面相学的な発想にそって家を買う際にはできるだけ眉を高く描く必要があるという。Lさん自身も、化粧はやめたものの眉は整えている^(注8)。

素肌観、化粧観と坐月子との関連

研究経過報告書で報告したように、台湾では、産婦は産褥期に「坐月子」といわれる特別な身体ケアをおこなう。坐月子のやり方は、地域や民族によりバリエーションがあるが、一般的に中医（漢方）的な観念に基づく食生活を送り、十分な休養を取ることが重視されている。台湾は多民族社会であるが、民族を超えて一般的に見られる習慣は、母乳がよく出て、子宮に溜まった汚れを出す効果があるとされるごま油と米酒（米焼酎）、生姜だけで炊いた骨付き地鶏のスープである「麻油鶏」を頻繁に食することが奨励されることである。ただし、伝統的な坐月子食は、栄養学的にみれば必ずしもバランスの取れたものではない。また、身体を冷やすことが徹底的に避けられている。頭痛持ちになるからと洗髪をしない、あるいは生姜の汁で洗髪をするなど、現代的な視点からみれば不合理な面もある。

しかしながら、この坐月子を1か月から1か月半程度実践することが、女性の身体から出産の際に失われた血を補い、次の出産への準備となると人々に広く信じられている。台湾の医療現場においても産褥ケアは重要視されており、西洋医学の面からの研究が進んでいる。台湾の医学界では坐月子の実効性に注目し、坐月子中心（産褥ケアセンター）や産後護理之家（産後ケアハウス）などが医院に併設されている。坐月子中心では、基本的に近代的な栄養管理に基づく3食のメニューと身体ケアが提供されている。独立した個室にシャワールームが併設され、巨大な壁掛けテレビ、無線LANなど高級ホテル並みの設備が整えられている坐月子中心もある。産婦専用のエステルームが併設されている坐月子中心もあり、利用日数に応じて特典としてエステチケットがついてくる。

また、民間業者による坐月子食の宅配サービスもある。従来、姑が嫁につくるものとされていた坐月子食であるが、口にあわないことで嫁と姑が気まづくなることを避けるために利用する家庭もある。また、姑自身が仕事を持つようになって忙しいために坐月子食を用意できず、宅配サービスを利用して嫁が自宅でゆっくり休養するようにする場合もある。このように、現在の坐月子にはさまざまな選択肢が用意されている。日本では、15年前から豪華な施設の整った産院で出産することが流行したが、まだ日本には坐月子中心に相当する施設は少ない。対して、台湾女性たちは経済成長とともに坐月子をより念入りにおこなうようになっている。世界最速で進む台湾の少子高齢化を見込んだ

医療機関の思惑もあって、公立・私立、規模の大小を問わず、坐月子中心が林立し、坐月子をめぐる関連サービスが充実してきた。

前述の研究者Hさんによれば、坐月子と美容効果との関係については、坐月子の目的からすれば副次的なものであるとしても、大いに期待されているという。坐月子を各人の体質に合わせて必要なだけおこなうことによって、女性は体質が改善して肌がきれいになるとされている。家庭でも、姑や実母が坐月子を実行しようとししない嫁や娘に「肌がきれいになる」と勧める傾向がある。生理が不順であったり、生理痛が激しかったりする女性は子宮が正しい位置になく、坐月子によって子宮が正常な位置におさまると考えられている。子宮が正常になると、肌質も改善するとされる。身体を十分に休め、妊娠中に溜まった体内の悪いものを排出することによって、顔色もよくなり、出産前の体型に戻りやすくなると考えられているのである。

3. 考察と総括

以上のように、30代後半以上の女性たちに対するインタビューから、化粧の方法を知らないため、塗るだけで済むスキンケアはするが、テクニックが必要となるベースメイク以上の化粧はおこなわない傾向があることが浮かび上がった。化粧は商売女性がおこなうものとして伝統的に避けられてきたことから、この世代の人々には「素肌至上主義」というべき傾向が認められる。また、坐月子においても、中医学的な身体観に基づき、素肌の肌質を向上させることが望まれている。こちらにしても、健康な身体、健やかな顔色こそが美しさの源という素肌至上主義に貫かれている。日本の女性なら医学美容を利用するまえに、化粧によるカバーアップを試み、施術後も化粧を手放すことはないだろう。しかし、Lさんが医療美容を経たのちにも素肌に回帰することからも、素肌至上主義の根強さが窺えるのである。紙幅の関係上、十分に対照して述べられなかったが、台湾女性の化粧に対する観念は、30代半ば以上と以下で大きく異なり、30代以下の女性たちは化粧に親しむようになっている。

インタビュー、文献研究、各地でのフィールドワークの結果、医学美容や美容整形などは、「きれいになりたい」という理由だけでなく、運気を改善する意味でおこなわれているのではないかとの感触をもった。台湾の民間信仰を研究する台湾・国立政治大学の陳文玲先生からの教授では、「開運」は商売上の言い方にすぎないが、台湾民間信仰では善きことを周りに分けるのが功德となるとの発想があるという。となれば、逆の発想もまたしかりである。日本人が想像する以上に、台湾の人々には顔と運気が連動するという発想が窺える。そのため、今後の研究課題としては、医学美容、整形・アートメイクなどと運気との関連につい

て取り組みたいと考えている。

謝 辞

この研究にあたって、林修澈先生、黄李平先生と王雅萍先生、陳文玲先生をはじめとする台湾・国立政治大学民族学系の皆さん、李婉蓉さんとそのご家族、許裕美さんとそのご家族、趙山河さんとそのご家族、蔡瑞祥さんとそのご家族、林清美さんとそのご家族、国立台湾史前文化博物館の皆さん、南王集落のプユマ民族の皆さんにさまざまな面でお世話になりました。ここに記してお礼を申し上げます。

(注)

1. アジサイ科の植物で、主に熱帯アジア、アフリカ、オーストラリア、中国大陸南部、インド、マレーシアに分布する。台湾では海岸の防風樹として東部と恒春半島、蘭嶼などに植生する。球状の実に棘と粘性があり、鳥や他の動物が運ぶことで繁殖する。プユマ民族において、南王集落では itreng、利嘉集落では iden、下賓朗と知本集落では 'itreng と発音する (李麗雲ほか 2009:108-9)。
2. 2010年11月、東京におけるK社台湾支社赴任経験者との歓談からの情報による。
3. 2011年10月、台湾・台東におけるM社台湾支社社員との歓談で確認をとった。日本ではシャンプーとリンス類はセットで売れるが、台湾女性は景品としてもリンス類は喜ばれないという。
4. 長期滞在中に、筆者は主に台東の南王集落の林清美さん宅に下宿した。この際、50歳の長男夫婦が利用する浴室を共有したが、シャンプーしか用意がなかった。片や、80歳の洪文貴さんと75歳の林清美さん夫婦は、ローカルブランドである耐斯(ナイス)社製の粉シャンプーを使用していた。台湾ではすでに粉シャンプーは「懐かしの商品」扱いだが、農村部を中心にいまだに慣れ親しんだものを使い続ける人々がいる。筆者は現地調達に徹しようと当初、台湾製のシャンプー・リンスを使用し、粉シャンプーも試してみた。しかし、数回の洗髪により髪がバサバサになったことに音をあげ、日本製のシャンプー・リンスを購入しなおして現在にいたっている。ちなみに、農村部でトイレを拝借するために一般家庭の浴室にたびたび入ったが、リンス類は見かけたことがない。
5. Euromonitorのデータをもとに財団法人生物技術開発中心が整理した統計では、アジア各国と地域でスキンケア化粧品に投じる平均費用は、日本の102ドルを筆頭に香港73ドル、台湾58ドル、韓国57ドル、シンガポール41ドル、タイ14ドル、マレーシア10ドル、フィリピン5ドル、中国4ドル、インドネシアとベトナムとインドが各1ドルである (財団法人生物技術開発中心 2009:26)。なお、Taipei Cosmetic Industry Association (台湾區化

粧品工業同業公會)のデータをもとに財団法人生物技術開発中心がまとめた統計では、2009年現在の薬用化粧品の市場比率としては、美白45%、アンチエイジング31%、修復(肌の再生)10%、保湿8%、その他6%であった (財団法人生物技術開発中心 2009:103)。

6. 結婚式のほか、端午節や中元節など季節の節目ごとに挽面をおこなう習慣があったという。挽面は、現在も伝統的な市場の付近で中年女性たちが営業している姿が見られる。1回につき30分から40分の時間がかかり、都市部では200台湾ドル(約750円)、農村部では1回150台湾ドル(約500円)程度で施術してもらえる。1980年代にスキンケア化粧品が盛んに輸入・販売されるようになる前まで、女性にとっては数少ない現金収入の得られる仕事であったという (羅 2004:66-69)。
7. 台湾政府は、同じく2008年に「チャレンジ2008」政策により、国家の主要重点産業として化粧品産業を位置づけた。台湾の化粧品市場はまだ小規模であり、企業も中小が多数を占めるために技術開発への投資が思うままにならない面がある。しかし、今後は台湾の衛生署がおこなうGMP認証が取れるよう推進するという (財団法人生物技術開発中心 2009:116-7)。
8. 台湾の整形事情を取り上げた雑誌『人籟論辨月刊』58号の特集では、自らの整形が子どもたちの運気を左右してしまうのではないかと医師に相談する母親が紹介されている。筆者の専門でいえば、眉やアイラインにほどこすアートメイクでも、「開運」を謳うタトゥースタジオがある。また、夜市などでは面相学にしたがって顔のほくろを取る施術者を見かける。台北駅の地下街では、伝統的な面相学の看板をかかげた医学美容のスタジオがあった (Fig. 7)。



Fig. 7 2011. 12. 11 台北駅地下街の美容医学コーナー 右手間に面相学の図が掲げられている

(参考文献)

- ・財団法人生物技術開発中心2009『薬妝品及医学美容産品之商機』財団法人生物技術開発中心・汐止
 - ・李麗雲、林佳靜、陳文德、鄭漢文編著2009『卑南族的家與植物』国立台湾史前文化博物館・台東
 - ・片岡巖1921『台湾風俗誌』台湾日日新報社・台北
 - ・羅秀華2004『台湾的老行業』遠足文化事業股份有限公司・台北
 - ・鈴木清一郎1934『台湾旧慣冠婚葬祭と年中行事』台湾日日新報社・台北
 - ・新竹州編1923『新竹州産業年報』新竹州・新竹
 - ・新竹州商工獎勵館編1939『新竹州物産案内』新竹州商工獎勵館・新竹
 - ・台湾総督府殖産局1931「台湾白粉に関する調査」『商工彙報』第5号 台湾総督府殖産局
- 〈雑誌〉
- ・2009「特集：訂做一个我 My Face, My Self」『人籟論辨月刊』58号、利氏文化有限公司・台北